

## 自然談話資料における引用表現の実態と分析

高 崎 みどり

### 1. はじめに

談話や文章を観察するうち、人のことばを引用という形でとりいれながら構成していくという方法が少なからず見られることに気づいた。量的にも多いが、質的にも色々な目的や方法で引用表現を使用しているのである。

引用研究は、文法論の方面で、砂川（1988）・鎌田（2000）・藤田（2000）および松木（2005）等の先行研究を多くもち、現在もさらに発展し続けているトピックである。また談話分析でもメイナード（2004・2005）等の精緻な研究がある。本稿ではそれらを参考にしつつ、自然談話に考察を限定する。

なお、ここでは引用表現を、引用内容と引用形式を備えた表現形式を基本とするものとする。引用内容とは、発話や文章テキスト、心内の言語化を含む。引用形式は、「と」を必須とし、「～と言う」「～と思う」を典型とするが、いくつかのパリエーションを幅広く含むものとする。

### 2. 先行研究から、談話の中の引用表現の働きの多様性について

なぜ、談話の中に、引用表現が使われるのか。もうすこし正確にいうと、なぜ、引用の形式が多用されるのか。

もちろん、単純には、人のことばや自分の発言を提示する必要があることだろう。しかし、実際の談話を見ると、引用形式や引用表現が、それ以外の副次的効果・機能を持つ場合や、他の言い方もできるのに、引用形式を選択している場合などが、多いように思われるのである。

本来の機能の他に副次的効果の考えられる表現形式ということでは、質問形式のケースがよく知られている。疑問終助詞「か」や疑問詞「どうして」等、質問の形式が、実際の会話の中で、挨拶（「お元気ですか？」）、非難（「どうしてあんなひどいことを言ったの！」）などの副次的効果・機能を伴って使用されることがある。質問形式の本来的な機能の方も、“反応（＝答え・情報など）を要求する”という意図の伝達として発揮されている。これから見ていく引用形式・引用表現の使用も、談話の流れの中でこそ、何かの機能が発揮される、ということがあり、また、引用の意味が形式化しているという面は質問形式などよりは広範囲に及ぶのではないかと考えられるのである。

このことに関しては先行研究にもいくつか指摘があるので、ここで、引用形式の、“引用する”こと自体以外の副次的効果や機能として指摘があるものを、まとめて示してみる。

- ① 提題の形で心理的距離を示す。発話末で伝聞・自嘲・説得など終助詞的に働く。発話冒頭で順番取りの手段として働く。——鈴木（2007）
- ② 断言を避けるという消極的態度を伝達——石塚（2004）
- ③ 言明・宣言としてのメタ言語表現で、苛立ちや批判の意図を示す——加藤（2002）

- ④ 情報源の種類により、擬似伝聞・問い返し・真意尋ね・態度表明などとなる——金善眞（2004）
- ⑤ 発話内容が、現在の発話の場に属さない、異場面の「物語」であることを表示する。推論過程を経て得られた結果を表示する。——加藤（1998）
- ⑥ 情報に対する距離を投影——澤西（2002）
- ⑦ 名付け・伝聞・つなが——中畠（1990）

藤田（2000）・松木（2001）・丹羽（1993）などでは、意味的にも、引用とはいえずに、かなり形式化して、他の機能を発現しているケースについて論じている。藤田（2000）の考えを受けつつ、松木（2001）は、引用機能を喪失し、複合辞的な表現形式に変化している「接続助詞的」な「～といえば」「～といっても」、「助動詞的」な「～という」「～と見える」、「連体修飾のつながの役割」の「という～」などに注目する。丹羽（1993）では、名詞を受ける「XトイウY」と、文を受ける「Sトイウ」について、前者は、名前と対象を同定する基本的意味を持つこと。後者は、発話・内的発話を引き写すものが基本だが、具体的な発話という面を失って、伝聞を表すもの、事柄を既存のこととして表す用例のあることなどを指摘している。

また、メイナード（2005）では、「引用という操作」の章で、バフチンBakhtin（1981）の“[声]の多様性”“対話性”の概念を使って、「自己引用」が話者のモダリティ表現となっていること、「架空引用」が「架空の話し手の声を利用して、引用者自身の発話・発話態度をより豊かに表現する手段」であることを指摘している。

さて、本稿ではこれらをふまえつつ、談話<sup>1</sup>に対象を限定し、トピックの展開の中での、引用の様相を見ていくこととしたい。

### 3. ストーリー的トピックと主張的トピックにおける引用表現

高崎（1994）では、自然談話資料の中の様々なトピック（話題）の中から、対照的な2種のトピックを「ストーリー的トピック」「一般論的トピック」と名付けてその構成要素としてどのような言語形式が現れているかについて考察している。「ストーリー的トピック」とは、過去の1回性の経験再現を目的とする会話のことで、その時に言ったり思ったりした内容として引用表現が使用されることがある。「一般論的トピック」とは、多くの経験から引き出される結論や考察が、一般に広く当てはまる事柄として主張される、その主張を述べる場合に引用表現が使用されることがある。本稿ではこの「一般論的トピック」を「主張的トピック」と言い換えて論を進める。

#### 3.1. ストーリー的トピック

次の例は、“夏休みをどうすごしたか”という、経験した出来事を語る、ということが目的となっている談話の一部である

例1 【資料Iから A・B・Cは10代男子学生、Dは10代女子学生 クラスメート同士。Bは2歳まで福岡、18歳まで大阪府に在住】

87	A	あ 大阪ね
88	B	(・・) ったし： <u>道頓堀でも行こうか：言うて</u> 道頓堀のほうまで見にいって：

89	A	うんうん
90	B	帰り：h h h べろべろになって： それ（・・）勝手に取ってるやんか↑
91	A	うん
92	B	こんな：h h h なんか変なおっさん二人 前（h）か（h）ら（h）来（h）て：h h h
93	A	うん
94	B	お前ら何しとんをや ていきなり来て：
95	A	うん
96	B	いや ただ今から帰るところですつつって：
97	A	うん
98	B	俺ら今から遊びに行くから お前 ちょっと付き合えや とか言うて
99	A	[h h h h h h h]
100	C	[h h h h h h h]
101	B	[h h h まじ迷惑] おっ メッチャ怖いな思っ て 速攻走って逃げて
102	A	お：：：
103	B	いや： あれは恐怖体験やな もう大阪行きたくない あんまり

このように、談話において、経験した出来事を話すときに、話し手自身や関与した人間の発話や思いを引用内容とした引用表現によって、構成する場合が見られる。上記の会話は、Bが「恐怖体験」としてストーリーのひとまとまりを語る談話であるが、88B「道頓堀でも行こうか：言うて 道頓堀のほうまで見に行って」94B「お前らなにしとんをや ていきなり来て：」96B「いや ただ今から帰るところですつつって：」98B「俺ら今から遊びに行くから お前 ちょっと 付き合えや とか言うて」のように一つのストーリーを語るのに、引用表現がいくつも連続して出現している。すなわち、出来事の実験が、そこで交わされたことばの集積として伝達されていることとなる。

また、88Bから「～言うて」「～行って」、90B「～なって：」、92B「～来て」、94B「～来て」、96B「～帰るところですつつって：」、98B「～言うて」、101B「～思っ て」「～逃げて」と、引用形式でないものも含めて、「～て」形がリズムカルに反復されて、継起的に出来事を語る調子を作っている。

この例は主として発話の引用の連続という形態で構成されているが、談話においては、過去の出来事を話すときに、上記101B「おっ メッチャ怖いな思っ て」のように、話し手自身の心内の言語化を引用内容として語ることもある。思うことの表明だけならば、103B「もう大阪行きたくない あんまり」というように、引用形式にのせなくても可能なのであるが、101Bは、過去に経験した出来事の一部であるため、引用形式にのせた方が自然になる。

こうした、出来事を心内の引用で語る表現が集中しているケースとしてたとえば次の例2の場合がある。大学入学の頃のことについての話題の中で、

例2 【資料Ⅱから E・F・G・Hはともに30代女性。大学時代の友人同士】

367	F	でもあれで私はねえ <u>場違い</u> なとこに来たと思ったも：ん
368	H	みんな思っ たよね：
—— 中略 ——		
390	E	<u>ほんと</u> どうなること [かと思っ たよ]

391	F	[ねえ] ほんとそんな風には全然見えなかったよ：↑
392	H	ええ いや そう だからほんとに あ みんないい人でよかった：と <u>思っ</u> て：
393	F	うんうんうん

367F「でもあれで私はねえ場違いなとこに來たと思ったも：ん」をきっかけとして、エピソード（中略部分）のあと、EやHが「ほんとにどうなることかと思ったよ」「あ みんないい人でよかった：と思って：」などと、その出来事の起こったときに、自分がどう思ったかを言い合っている。

また、同じ談話資料Ⅱで、例2とは別の箇所だが、共通の知人が病気になったたときのことが話題になる部分がある。そこでは、病名や入院した病院などの情報的なことは語られていないが、その出来事自体についての自分の感情や評価が語られるのである。G「彼女、退院できてほんとに良かったと思ったよ」G「たぶんすご：く浄化して帰ってると思ったよ」のような例である。すなわち、これらの例においては、ある出来事の体験が、それによって引き起こされた現在の感情的反応、すなわち心内の言語化の引用として語られたことになる。この場合は引用形式にのせなくても、現在思っていることの表明であれば「彼女、退院できてほんとに良かった」「たぶんすご：く浄化して帰ってるよ」とストレートに言っても不自然ではない。

話を戻すが、こうした、心内の引用の場合、動詞（「思う」など）が使用される場合のほか、「という」「ていう」の類を介して、「感じ」のような感情を表す名詞につなげる場合も少なくない。たとえば、この知人の病気のことについての会話で、病気のことをはじめて知った時の、自分たちの感情的反応に焦点をあてて、出来事の再構成・確認が行われる部分がある。そこでは、F「それでお家に電話したんだけど なんか いまひとつ こういい雰囲気じゃなかった っていう感じで話してたんだよ」H「それで実家にいる：↑って で なんか うーん↑っていう感じだったんだよ」のように「ていう感じ」が使用されているのである。このように、「思う」系の動詞だけが心内の引用に関与する、というわけではないのである。

ただ、心内の引用に関しては、「～と思う」「～と思います」「～と思っています」のように動詞で受ける場合も幾つかのモダリティ的段階がある。それらと、この「～という思い」「～という感じ」のように名詞で受ける場合では、さらに、引用内容と話者との関係性が微妙に異なるように思われるが、今は指摘にとどめる。

どちらにせよ、以上のように、出来事を話者が自分の心内の反応を通じて語る方法は、出来事自体をより自己の側にひきつけた形でストーリーを述べることとなる。

### 3. 2. 主張的トピック

以下は“若者ことば”についての話し合いの中の部分である。

例3 【資料Ⅲから Aは50代男性、Bは40代男性、Cは30代女性 いずれも大学の教員】

896	B	いや ここで 突然 その 話が <u>変わ 変わって</u> というか その <u>婉曲表現を うまく利用した 詐欺っつ</u> の あるじゃないですか
897	A	詐欺？

898	B	あの <u>私</u> 消防署の方から 来ました [っっていうのが あるじゃないですか]
899	C	[あ： h h h h]
900	A	[ (・・・) ]
901	B	[そうです] <u>警察の方から 来ました とか</u>
902	C	[う：ん]
903	B	あれね：h h <u>最初に考えたやつは</u> <u>すごいな：と</u> [思うんですよ]
904	A	[う：ん]
905	C	[う：ん]
906	B	だって <u>消防署の方から 来ましたって</u> 言っても [ (・・) わけでしょ? ]
907	C	[う：ん]
908	B	でもね：h h 聞いてたらね：h h <u>警察呼んでも</u> <u>警察</u> <u>警察の方から 来ましたっていうんだよね</u>
		(中略)
912	A	本物の <u>警察官も</u> <u>それは</u> [面白い]
913	B	[ (・・) <u>警察の者ですが</u> とか]
914	C	うん
915	B	<u>何々署の 者ですがって</u> <u>言えばいいのに</u> <u>警察の方から 来ましたって</u>
916	C	[ほんとに h h h h]
917	A	[おま お前も <u>詐欺だっていう</u> ]
918	B	そうそうそうそうそう <u>帰れっていう</u> [h h h h h]

この例では、Bが896Bから903Bまでの発話で“婉曲表現をうまく利用した詐欺を最初に考えたやつはすごいと思う”ということを主張しようとしている。その主張をするために、903Bで、「～と思うんですよ」という心内表現の引用形式を使用している。

さらに896Bで総括的に言った「婉曲表現をうまく利用した」ということの例として898B「私 消防署の方から 来ましたっていう」や、908B「警察の方から 来ましたっていう」のような、仮想の発話を比喩的に引用して主張に説得力を増し、906B・913B・915Bで駄目押しのように仮想の引用を繰り返している。Aも共感的に917Aで同様の仮想引用形式を使ってオチをつけようとし、918Bもそれに合わせて自分自身でもオチをつけてやはり実際に言われてはいない引用表現を使っている。

こうした引用表現の使い方は、主張的トピックにおいて、引用表現でそれについての説明をより具体的に行うことができ、共感も得られやすいものであると思われる。

なお、896Bに「話が違ってというか」の引用形式があるが、これは語句レベルにとどまり、文脈展開というスケールでトピック形成に関与しているわけではないのでこのトピックを見る章ではとりあえず問題にしないことにする。

以上のように、引用表現・形式は、トピックの性格という談話レベルで見ると、出来事をドラマチックに語る場合や自分にひきつけて生々しく語る場合、あるいは、主張的な話題をなげかける場合や、その説明のときの具体化の手段に巧みに利用されているといえそうである。

また、引用表現に発言の引用と心内の引用との2種類を考えれば、ストーリー的トピックにおいては、登場人物の発言の引用で構成され、主張的トピックは話者の心内引用で構成されるのが典型的なパターンと考えられるのであるが、実際にはストーリー的トピックが心内引用で構成される場合もあり、主張的ト

ピックは、仮想までして、発言の引用で展開する場合もあったわけである。

## 4. 談話に見られる引用形式の特徴

さて、文章テキストで引用表現をみるとときには、直接引用と間接引用というような区分けがなされることも多い。ところが、自然談話ではそうした角度では実態が捉えにくい面がある。ここでは、前節で、発言の引用と心内の引用として、区別していた引用表現を、引用動詞の種類に置き換えて捉え、引用動詞に着目して、談話にみられる特徴、という観点から考察してみたい。さらに、今回対象とした談話資料に関して気づいたことを1, 2点付け加えたい。

### 4. 1. 「ト言ウ」系と「ト思ウ」系

引用形式を引用動詞の種類で大きく分けて、「ト言ウ」系と「ト思ウ」系とする。上記例1の96B「いや ただ今から帰るところですつつて」の下線部を「と言って」が転訛したものとみして、これを「ト言ウ」系とする。「ト思ウ」系は、101B「おっ メッチャ怖いな思って 速攻走って逃げて」のような例で、「メッチャ怖いな（と）思って」の「と」が省略されていると考える。前節で「心内引用」と言っていたものである。

どちらも言語的・心理的活動を語彙的意味として含む語であれば、「書く」「呼ぶ」「聞く」や「感じる」「考える」などもそれぞれの引用動詞に入る。なお、文章資料（高崎2007で扱ったもの）では両系とも引用動詞の種類は様々出てきていたが、談話資料では「言う」「思う」といった少数に集中していた。

ここでは「ト言ウ」系と「ト思ウ」系として引用動詞を含む引用形式を代表させてみるわけだが、従来、引用というと、「ト言ウ」系の方がとりあげられることが多かったように思う。しかし、今回「ト思ウ」系の方にも注目し、語としての「言う」と「思う」の意味についても少し考えてみたい。

語としては、「言う」「思う」両語とも、古典から近代までの種々のジャンルの語彙データにおいて、頻度順にはかなりの上位にランクされる語である。そして単純な延べ語数であると、「言う」の方が上位にあるものが多いのである<sup>2</sup>。

両語とも多義語であり、複合語・連語、形式化も古代語から多く見える。特に「言う」の方は「言う」という語自体が、「語る」や「書く」と比べると、もともと抽象的で、形式化しやすい面を持っており、具体的意味が薄れた用法も古代語から存在する<sup>3</sup>。「てふ」「てへり」「てへ」等変形も古くから存在する。

また、「いう」「思う」を含む接続詞・接続詞的表現を、青木伶子氏の調査（『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』『接続詞および接続詞的表現一覧』）から拾うと、計86種類に上った。この青木氏調査は上代から現代に至るまでの文学作品類を主たる対象としている。ここでもやはり「さはいえ」「これというも」など「言う」から発したものが圧倒的に多く、「思う」を含むものは「そうかとおもえば」「とおもうまに」など7語であった。

「言う」とは「思うこと、見聞したことなどを言葉に表す。」（『日本国語大辞典』）とも説明されるので、「思う」限りでは「まだ言っていない」ことになるし、「思っている内容」は「言う可能性のあること」になろう。しかし、音声でも文字でも1人称で「～と思う」と表現されてしまえば、思っていることを現に「言うて」いることになる、というのも事実である。

一方、「～と思った」と過去形になれば、1回性の出来事という面が強くなり、モダリティやニュアンスもまた異なってくるなど、テンスも関係してくる。

今回の談話資料の中に、教員と学生の面談の談話資料（資料Ⅳ）があって、教員が「入学してから何を得ましたか？」と聞くと、学生は「得たのは、こう、勉強のしかたが、どうすればいいか、わかるようになったと思います。（中略）あと、慣れました。慣れたって言ってもいいと思います」と答えている。「～と思います」のように引用形式にすることで、「思う」の、「心内言語化を引用内容とする引用表現」という機能に留まらず、ひとまず明確な言い方をしておいてから、“これは言うべきことではないと認識している”という留保姿勢を伝えることができる。また、「～と言ってもいいと思います」のように「言う」と二重引用にすることで、言いにくいことをあえて言っているという姿勢を伝えることが可能になる。

さらには、最近よく使われる言い方だが「わたしは（僕は）～思っていてェー」「～思っています」とアスペクト化することで、言っている現在まだなお、“思う”ことが続いている状態を表明し、留保姿勢をより強く伝達することが可能となる。

女性の話者でも「馬鹿か、って思って」のように、「～と思う」形式ならジェンダーにとらわれない表現も可能になる。

このように考えると、「思う」の使用は、確かに心的内容の引用には違いないが、実際に談話・文章で使用されるにあたっては、「言う」とは異なる、言明のさまざまなストラテジーが介在している、という使用実態が観察される。

また、「ト言ウ」系は、「と言われる」のような受身の視点で表現されることも少なくない。後出になるが例5の談話資料の650F「っていう風に言われて」のような例である。その他、「と言える」のような言い方も多い。「ト思ウ系」でも「と思える」（自発）、「と思われる」（自発・受身）類等があり、「ト言ウ系」と「ト思ウ系」では、助動詞「レル」を、受身・可能・自発用法以上に拡張した、巧妙に断定や責任を避ける手段としていろいろなバリエーションが見られるのは、談話も文章と同様である。これについてはまた稿を改めて論じたい。

#### 4.2.「言う」＋（心理を表す）名詞

先の3.1でも触れたが、今回の談話資料には、「ト思ウ」という形ではなく、「～という感じ」「って気持ち」等、「言う」が形式化し、連体修飾のように働いて心理を表す名詞につなげる形態が多くみられた。先の例2の続きの会話にその例がある。

例4【資料Ⅱから E・F・G・Hはともに30代女性。大学時代の友人同士】

394	H	ほんとホッとした：だから（.）私の大学の四年間は：すごーいなんかぬるま湯 <u>というか</u>
395	F	あーうん
396	H	温室 <u>というか</u> ：なんかこう敵がいないっていう感じで：
397	F	う：ん
398	H	すごーいねえ幸せな

396H「温室というか：なんかこう敵がいないっていう感じで：」のように、心内の引用を、「～と思う」という作用としてでなく、いったん「いう（言う）」で捉え、さらに「感じ」や「気持ち」で名詞化

して表現するのである。これはいわば、「ト言ウ系」で「ト思ウ系」を表した形になっており、両系がひとつの表現に働いていることになる。いったん言葉として外に向かって表現した内容を、また、心内に戻してしまい、再びそれを取り出すという操作がなされていると考えると、なぜそのような複雑な操作が必要であるのかと、きわめて興味深いものがある。

もちろん心理を表す名詞のみならず形式名詞的な語、すなわち「こと」「くらい」「よう」「ふう」「の」などにもかかっていく。Ⅱの資料だけでも以下のような例が見出せた。

いじめとかっていう言葉 負けられねえなってことで 馬鹿かってレベルで っていうふう  
に っていうのがあっての で?っていう感じ (以下略)

あるいは連体詞的連語に固定したもの(そういう そういった こういう どういう 等)もある。語句や文相当の内容を捉えなおして連体修飾としてつなげる語法(○○○と(って)いう××)にも「言う」が介在する。

このように見てくると、テキストや談話において引用動詞としては「思う」より「言う」の方が、形式化したものから実質的な用法まで深さと広がりをもつ。やはり引用の本質は発言・発話の引用であり、「思う」はそれに比べて実質的には発言であるものに特殊なニュアンスを付加する、二次的な存在といえないであろうか。

#### 4.3. 引用表現の多重使用

最後に、引用表現が1つの発話のまとまりに何重にもなって現れる現象について触れておく。それは、今までで述べてきたような、「言う」の色々な段階の引用形式がそれぞれに働いた結果生ずる現象である。

先にも少しふれたが、引用形式には他の要素と複合したりして、引用の実質的機能が薄れて形式化する場合がある。以下の例で確認してみよう。

例5【資料Ⅱから E・F・G・Hはともに30代女性。大学時代の友人同士】

644	F	そうすると高校から先ともかく中学まで よ 幼稚園からずっと一緒だから：
645	E	うん
646	F	<u>と：自分のなんていうか ベースができるっていうか：</u>
647	E	うんうん
648	F	<u>気持ちの(・) 抛り所↑</u>
649	E	ああ：抛り [所ね：]
650	F	<u>[ができる：] っていう風に言われて ああ も そう そうかもしれないなあって</u>
651	E	うんうんうん [うん]
652	F	<u>____ [そう] いうことも</u>
653	E	う [ん]
654	F	<u>[思] ったりね</u>

この646F「と：自分のなんていうか ベースができるっていうか：」の「なんていうか」は、引用の意味は皆無ではないが、結果としてフィラー的に働いているようである。今回の談話資料全体で見れば、引用の意味の残存程度に幅があり、それにしたがってくずれ・縮約などの変形の程度も様々ながら、「な

なんていうの」「なんていうのかな」「なんちゅうか」「っていうか」「つーかさ」「つってもなー」などの“フィラー”的な働きをするもので「言う」を含むものは非常に多くみられた。

646Fのうしろの「っていうか」も“このように言うが、まだ他にも適切な言い方があるからそれを今から言う”といった含意を示し、時間稼ぎのフィラー的な言い方である。

他にも、発話の始めの方で「っていうのはね」「そういえば」「それというの」「ていうか」「てか」「そういうんで」「なぜかっていうと」「どっちかっていうと」などつなぎ表現的な働きのないしは順番取りのような働きをするものに「言う」を含むものは非常に多く、複雑に発達してきている傾向が談話でいっそう強く伺える。

こうした形式化した“弱い”“小規模”な、“見せかけの”引用表現が、文レベル、談話レベルの“強い”“大規模な”“本物の”引用表現の中に複雑な入れ子のように入り込んでいるのが、たとえば例4の644から654までのFの談話である。途中にEのあいづちが入ってはいるが、644から654までは一応1回の発話で済ませられる内容、構造を持っている。654Fに「思ったりね」とあるように、ここまでの内容は、“ナニカヲ思った（従属節＋述語節）”という、Fの言いたいひとまとまりの思考内容である。そこに従属節としての644から650までの「～言われて」という引用内容が入り込み、さらにその中に650F「ができる：～っていう」という他人の言葉の引用が入り込んでいる。さらにその“言われた”ことの中に646F「ペースができるっていうか：」という引用形式が躊躇いの意味で入り込み、「なんていうか」という引用形式がフィラーとして置かれている。また、声の調子を変えるわけではないので、どこからが引用なのか、引用始発箇所が不明なまましばらく続いていく。F自身の言葉かと聞いていると、その前に話題になった、子供が小学校のときの先生の言葉の引用の続きだということが650F「ができる：っていう風に言われて」ではじめてわかるのである。しかも、644F・646F・648Fのすべてが小学校の先生の言葉の引用なのか、それとも一部だけなのかは不明である。しかしながら、コミュニケーション上はそれが明確でなくても、何の問題もないので、誰も「それは誰の言葉？」などと聞いたりしない。

述語節の方へは、“思った”内容をさらに652F「そういうこと」と捉えなおして、やっとかかかっていく、という、引用形式だけで見れば、多重引用とでも言えそうな複雑な入れ子状になっている。

考えながら追加していく談話特有の無計画性、即興性のもたらす不明確さである。さらに、この話の終わりでは654F「思ったりね」と、結局自分の“思うこと”で、主張的トピックとして収斂していく形になっている。

これも、談話特有の、視点のめまぐるしい入れ替わりや、方針の絶え間ない変更、考えながら話し、かつ話しながら考えるという可変的な話線形成がもたらしたもののといえよう。

#### 4.4.【“語り”の面白さ】

例1には、「94B お前ら何しとんのや」のように語り手が大阪弁風の話し方を真似て引用した部分がある。それはそのまま肉声としてのイントネーションや語彙などに反映されたわけで、談話には、発せられた声を、肉声を使って表現することの有利さがある。演技とまではいかないにしても、しぐさや表情まで含めて、大阪で遭遇した出来事、という具体性が即座に伝わるのが話を面白くしている。話の最中に聞き手が笑い声を発しており、この話は成功した（受けた）といえる。

一方、これらの引用表現で表されている内容は、別の表現方法でも伝達可能だったはずである。たとえ

ば、例1とは別の資料Vでやはり大学生3人が夏休み中のことを話しているのだが、b（首都圏の女子大学生 10代）が次のように言う。

例6

262	b	富士急行って： <u>なんか雨だったの：(.)</u> <u>なんか なんもやってなくて：(.)</u> <u>そしたら</u> <u>なんかもう それで1時間ぐらいお土産見てて：</u> <u>なんか友達と</u> <u>これなんか愛くるしい</u> <u>じゃん 買わないって。</u>
-----	---	---

262bの前半下線部は要約的に語られているだけであるが、「そしたら」以降のお土産を見ている場面については「これなんか愛くるしいじゃん 買わないって」という引用が示されている。このように、一連の出来事を、会話引用や心内引用などの引用表現を使わずに説明することも、会話引用を選択することも、どちらも出来事を語る方法として可能なわけである。この、要約的に語られている部分はもう話題として続かず、聞き手の笑いも誘わず、わざわざ観光地に行ったのに、雨でアトラクションがなかった、というストーリーは充分語るに値する経験だと思うけれども、いわゆる“受けて”はいない。日常会話では、経験はもちろん面白くなければ語る意味は無いが、それ以上に、面白く語らなければ、聞いている意味がないのであろう。例1を参照してもわかるように、引用表現は、その“面白い語り方”に寄与している。

## 5. まとめ

談話資料にみる引用表現の実態を、引用形式の形態や、引用内容やその集積がトピックを構成する場合に注目して観察した。その結果、談話の中で出来事や主張を語る方法としての引用形式、という捉え方を示した。引用形式の形態としては、大きく「ト言ウ」系と「ト思ウ」系を考えた。また、引用の働きが薄れて形式化し、引用以外の機能も受け持つものが重なって多重引用となっているケースも見た。

引用表現は、もともとは異なる場面・次元で発せられた談話や文章を、異なる場面や次元で発せられたものとして、現在進行展開している文章・談話にとりこむものである。談話における引用は、特に会話の引用に限定すると、文章の会話引用が【元・談話→現・文章】という次元の異なる移行を含み、そこに困難と、操作の余地が存在するのに対し、談話の会話引用は無計画になされても、【元・談話→現・談話】という、単純な同次元の移行である有利さを生かせるもの、とも言えよう<sup>4</sup>。それが語り方の面白さにもつながっていく。

やり残したことも多く、「～という」を介して「気持ち・感じ・疑問・認識」等につなげるタイプに着目したが、「～と思う」とストレートにいう場合と、わざわざ「と言う」を介した「～っていう気持ちだ」のように連体修飾形式を通して名詞化している場合との比較が今後の課題である。助詞「と」の状態性提示や「言う」の多義・抽象性など語彙的意味の吟味、「思う」や他の引用動詞との実態比較といった面からの考察も今後必要である。

## 注

1 使用した自然談話文字化資料は以下のとおり。

資料Ⅰ 首都圏大学生4人（10代 男子3名A・B・C、女子1名D クラスメート同士）が、夏休みに体験したできごとを話題にして話している。約15分で603レコード。

資料Ⅱ 30代の女性（学生時代の友人同士）の4人E・F・G・Hが、雑談をしている。約30分で1143レコード。

資料Ⅲ 首都圏大学教員3人（50代男性A、40代男性B、30代女性C）が若者言葉を話題にして話している。約50分で2098レコード。

資料Ⅳ 首都圏の50代女性大学教員が20代女子留学生（国籍タイ・台湾 2人とも博士前期課程在籍）と面談している。約50分で1104レコード。

資料Ⅴ 首都圏大学生3人（10代 男子1名a、女子2名b・c クラスメート同士）が、夏休みに体験したできごとを話題にして話している。約15分で634レコード。

以上の談話資料からの例1～6中の記号について——「(・・)」は聞き取り不能な発話で、相対的な長さを点線の長さで示す。「↑」は上げイントネーション、「:」は直前の音が引き延ばされていることを示し、:数は引き延ばしの相対的な長さを表す。「h h h」は、たとえば笑いのような呼気音を示し、h数は呼気音の相対的な長さ、「(h)」は呼気音がことばに重ねられて（笑いながら言う、といった場合）いることを示す。「[」は参加者の音声の重なりが始まったことを、「]」は終わったことを示す。番号はライン番号。この文字化の基準は、【串田秀也・定延利之・伝康晴『活動としての文と発話』ひつじ書房 2005年】などを参考にさせていただいた。

- 2 『古典対照語彙表』によれば、『竹取物語』『伊勢物語』『古今和歌集』『土佐日記』『枕草子』『更級日記』『大鏡』『方丈記』『徒然草』では「言ふ」の方が「思ふ」よりも高頻度で出現している。しかし、『源氏物語』（言ふ 1228<思ふ 2468）、『後撰和歌集』（言ふ 89<思ふ 192）、『万葉集』（言ふ 250<思ふ 400）では逆になっており、『蜻蛉日記』（言ふ 466>思ふ 444）、『紫式部日記』（言ふ 69>思ふ 64）では接近している。「思う」の方が「言う」よりも高頻度であったり、その差が接近している作品もあることは興味深い。

また、近代語では、田中（1978）によれば近代文学作品の高頻度語彙調査でも志賀直哉・芥川龍之介などの7作品において、すべて「言う」が上位20位以内に、「思う」はそのうち3作品で20位以内に入っている。「言う」のみに注目すると、『図説日本語』巻末表の近現代各種語彙調査一覧で、話しことばでは6調査のうち2調査で上位20位以内に、書きことばでは「雑誌90種調査」「郵便報知調査」など7種類すべてで20位以内に上がっている。

- 3 『日本国語大辞典』の「言う」項目の「㊦自動詞⑤」に「助詞『と』について『と』の受ける事柄を取り立てて、それに関して下に述べる場合に用いる。具体的な意味の薄れた補助的用法。」の例として、「秋といへば心そ痛きうたて異（け）に花になそへて見まく欲りかも」（『万葉集』20-4307 大伴家持）と「心もゆかぬ世とはいひながら、まだいとかかるめはみざりつれば」（『蜻蛉日記』）などがあがっている。
- 4 ほかに【元・文章→現・談話】と【元・文章→現・文章】のパターンが考えられる。【元・文章→現・談話】としては、談話資料Ⅰにファックスに書かれた内容が、談話で引用されているところがあった。講義・講演の中で、テキストやプリントを読み上げるのもこれに入る。【元・文章→現・文章】については、別稿（高崎2007）で分析した。

## 文献

青木伶子1973「接続詞および接続詞的表現一覧」『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』明治書院

- 石塚京子 2004 「話し言葉における『という』の語用論的考察——話し言葉のデータベース『日本語話し言葉コーパス』の分析を通して」『日本語教育学会（東海大学）予稿集』
- 加藤陽子 1998 「話し言葉における引用の『ト』の機能」『世界の日本語教育』8
- 加藤陽子 2002 「Face Threatening Actを明示するメタ言語表現について—討論形態の談話の分析から—」『日本語科学』11
- 鎌田修 2000 『日本語の引用』ひつじ書房
- 金善眞 2004 「日本語の文末引用形式について」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』17
- 澤西稔子 2002 「伝聞における証拠性、及びその特性——『そうだ』『らしい』『とのことだ』『ということだ』『と聞く』の談話表現を中心に」『日本語・日本文化』28 大阪外国語大学留学生日本語教育センター
- 鈴木亮子 2007 「他人の発話を引用する形式」『言語』36-3 大修館書店
- 砂川有里子 1988 「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9
- 高崎みどり 1994 「ストーリー的トピックと一般論的トピックのレトリック」財団法人東京女性財団 1993年度助成報告書『職場における女性の話しことば—自然談話録音資料に基づいて』
- 高崎みどり 2007 「随筆テキストの文章特性」高崎みどり・新屋映子・立川和美『日本語随筆テキストの諸相』ひつじ書房
- 田中章夫 1978 『国語語彙論』明治書院
- 中畠孝幸 1990 「『という』の機能について」『阪大日本語研究』2
- 丹羽哲也 1993 「引用を表す連体複合辞『トイウ』」『大阪市立大学文学部紀要 人文研究』46 第一分冊
- 林大 監修 1982 『図説日本語』角川書店
- 藤田保幸 2000 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 松木正恵 2001 「引用と話法に関する覚書」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47 第三分冊
- 松木正恵 2005 「引用と話法」『日本語学』24-1 明治書院
- 宮島達夫編 1971 『古典対照語彙表』笠間書院
- メイナード、泉子・K 2004 『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版
- メイナード、泉子・K 2005 『談話表現ハンドブック』くろしお出版
- Bakhtin, M.M. 1981. *The Dialogic Imagination*. Ed. by M.Holquist and trans. By C.Emerson and M.Holquist. Austin :University of Texas Press.

#### 付記

本稿は、第46回表現学会全国大会での発表（2009年6月 山口大学）をもとに、加筆修正したものです。当日、会場の諸先生方より、種々の貴重な御指摘・御助言をいただきました。誠に有り難く、この場をお借りして深謝申し上げます。

本研究は、平成19年度～平成21年度科学研究費補助金研究（基盤研究C 課題番号：19520387）「言語行動としての広義引用表現の研究」（研究代表者：高崎みどり）の助成を受けている。